鞄の中身

鞄の中身

吉行淳之介

講談社

鞄の中身

昭和四十九年十一月二十八日　第一刷発行
昭和五十年四月二十一日　第六刷発行

著者　吉行淳之介

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）　振替東京三九三〇

印刷所　信毎書籍印刷株式会社

製本所　株式会社国宝社

落丁本、乱丁本はおとりかえします。

© Junnosuke Yoshiyuki 1974, Printed in Japan

定価は箱に表示してあります。（文1）

目

次

紺色の実 7
蝿 14
歯 19
古い家屋 21
百メートルの樹木 31
楽隊の音 51
花畠 55
鞄の中身 58
スーパースター 76
小石 95
薬 105

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

壁 113
その魚 117
都会の雪女 125
暗い道 148
独語癖 159
パーティー 179
白い半靴 189
三人の警官 206
ミスター・ベンソン 218
あとがき 238

装幀　栃折久美子

鞄の中身

紺色の実

庭の隅まで、女は歩いて行って、蹲まった。葉のあいだから、薄紫色の花がたくさん覗いている。

狭い庭の黒い土を掘り返して、そこに茄子の苗を植えたのは、一ヵ月ほど前のことである。女は三十歳をすこし過ぎているので、戦時中は小学校に入ったばかりだった。当時は、食糧不足を補うために、庭で野菜をつくっている家が多かった。女にも、その記憶は朧げにあるが、それをおもい起しての仕業ではない。

気を紛らわすことさえできれば、どんなことでもよかった。たった一つの条件

は、軀の一部を動かしていることである。女は編物をはじめた。絶えず手を働かしていると、頭の中がしだいにとりとめなくなってゆく。

近所に買物に行った途中、植木屋の店先で幾種類かの苗を見つけた。茄子の苗を選んだのは、偶然といってよい。

草花の苗は、わざと選ばなかった。きれいな花が咲くことを、女は好まなかった。もっとも、野菜でも実を結ぶ前には花が咲くが、その種の花はみんな地味である。それに、女の頭の中では、苗がそのまま野菜の形に結びついた。

地面を掘り、苗を植え、朝晩庭に出てジョウロで水をかける。それが、女の気に入った。

苗を植えたころ、女はある男と別れている。その男との経緯は、夫には内密にしておく心構えでいた。夫と別れる気持はない。幼い子供も、二人いた。

しかし、男との関係も、浮気とは言い切れない。お互いに、惹かれるものがあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ったが、離婚をしてまでという気持には、二人ともなれなかった。

家庭のなかのいざこざが公けになると、社会的な立場が崩れるおそれがある職業に夫はついているので、それが女をためらわせた。すくなくとも、女は夫を憎んではいなかったのだ。

男のほうも、遮二無二女を奪い去るだけの情熱に欠けていた。二人とも、分別のある年齢になっていた。しかし、女と男とのあいだに、恋に近い感情が流れていたことはたしかである。

しずかに、二人は別れて、それぞれの生活に戻った。

たくさんの薄紫色の花を見てから数日後、女はその花の幾つかの根元が紺色にふくらみかかっているのに気付いた。

花弁が萎れて、実のかたちができかかっている。

茄子の葉も茎も、くすんだ紫色をしている。日が移るにつれて、紺色の小さなまるい実の数が増えてゆく。

ある早朝、蹲まって覗いてみると、親指の先くらいの大きさの実が「一斉に」という感じで、背の低い茎と細い枝のあいだに並んでいた。

ところどころ、ウズラの卵くらいの大きさの実も混っている。

仔細に眺めてみると、すべての花の根元が膨らんで、実になりかかっている。仇花(あだばな)は、一つもなく、それが女にとって一瞬たじろぐほどの異様さであった。

隣りに植えてある茄子を調べてみると、事情はまったく同じである。十本近く買ってきて植えた苗なので、数え切れないと言ってよいほどの薄紫色の花の根元が、膨みかかったり、拇指頭大になったり、ところどころその二倍くらいの大きさになったりしている。

一つだけ、鶏卵大にまで成長している濃紺の実があった。

いずれは、全部の実がそれくらいの、あるいはもっと大きな形になるのだろうか。しかし、その考えは女の心に刺さってこない。たくさんの大きな実を支え切れずに傾いている細い茎を想像すると、むしろ気持が和んだ。

不気味なのは、すべての花が実に変り、小さな紺色の茄子がうじゃうじゃ細い枝にへばりついていることである。

「花がみんな実になっている」

女はおもい、不意に不気味さが、もの哀しい気分に変った。

蹲まったまま、艶のある表皮を指先で撫でてみて、

「なまじ花が咲かなければよかったのに」

と、呟いた。

もの哀しい気分は、一層強くなってきた。

慌しく、女は軀を動かしはじめた。まず、茄子の枝からすべての実を搦り取っ

た。

枝や茎を傷めることなど、頓着はしなかった。ものに憑かれたように、手を動かしつづけ、かなり長い時間が経った。

女の足もとには、紺色の実が積み上げられていた。ぼんやりした眼で、女はしばらくその紺色の堆積を眺めていたが、小さなシャベルを握ると庭の隅に穴を掘りはじめた。

入口を小さく、奥へ深く掘った。その穴の中へ乱暴な動作で茄子の実を投げこみはじめたが、その手の動きはしだいに緩慢になり、全部の実を落しこんだときには、女の心には悲哀に似た気分が一ぱいに拡がっていた。

土で、穴の口を塞ぐ。

余った土が、いま埋めた穴の傍に散らばっている。その黒い土をしばらく眺めていた女は、汚れた手のまま家屋のほうへ歩み出した。

日曜日の朝である。
夫はまだ家の中で、深い眠りにいる筈である。

蠅

少女は、慎重に育てられてきた。高校生になってからでも、学校から帰ってくると、はっきりした行先と所要時間が分らなければ、外出を許されなかった。一人娘で、とくに父親が厳格であった。

家庭では自分だけの部屋を、少女は与えられていた。寝床に入ってから、ときおり少女の軀の中で漂いはじめるものがあった。やがて、不意に熱いものが軀の芯に這入りこんでしまう。

そういうとき、少女は起き上って、鏡の前でパジャマを脱ぐ。まったくの裸に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com